

優秀賞

水辺の生き物を守る

茨城大学教育学部附属中学校

二年 山崎千鶴

私はシジミの味噌汁が大好きだ。小学校の校外学習で涸沼のシジミの味噌汁を飲んだ時、その粒の大きさとおいしさにとても驚いたのを覚えている。

味噌汁にするシジミの多くはヤマトシジミという品種だが、これは涸沼のような汽水湖に特有のシジミだという。その校外学習で学んだのだが、涸沼は涸沼川からの淡水と太平洋からの海水が入り混じった、川と海の間地点のような場所である。

昨秋からこの冬にかけて、日本各地では降水量が少なく、水不足だと報道されていた。私の住んでいる水戸ではなんと八十四年ぶりに一月の降水量がゼロミリだったという。雨が降らなかったこの時に、私は水道の水の匂いがなんとなくいつもと違って土

臭いように感じた。ちょうどその頃、水戸市では「飲み水がかび臭い」「泥臭い」といった苦情がたくさん寄せられたという。原因は取水している那珂川の川底の藻だったらしい。川の水量が減り、太陽光が川底に届きやすくなったことで藻が増殖し、藻の生み出す悪臭物質が増えたことが原因とされる。人体に影響はないというが、臭い水は使いたくないと思った。そして、那珂川の水量が少なくなつたということは那珂川水系からの水が流れ込んでいる涸沼にも影響が出たのではないかと思い当たつた。

涸沼は先にも述べた通り「汽水湖」である。那珂川水系の涸沼川からの淡水だけでなく、太平洋からの海水も流れ込んでいる。だから、水不足になつても相対的に水分量に大きな変化は出にくいようだ。しかし、淡水の量が減り、海水の割合が増えたら、涸沼の塩分濃度が上がってしまう。それから、川の水量が少なくなつたら川の流れの勢いを失ってしまうから、涸沼がよどんでしまうのではないか。それは、ヤマトシジミには生きにくい環境になってしまうと

思う。

調べてみると、ヤマトシジミは比較的いろいろな塩分濃度に適応しやすい品種で、急な影響は出にくいという。しかももともと降水量の少ない冬は生物の活動性も低いし、短期的な影響は小さいというものだった。ほっとした気持ちになったが、この春から夏にかけても雨が少なく塩分濃度が高いまま維持されてしまい、水はよどみ、繊細な稚貝は育ちにくくなるだろう。

そんな水質の変化に適応してきたはずの涸沼のヤマトシジミも年々漁獲量が減っているという。

二〇一一年の東日本大震災で涸沼の一带は震度六弱という揺れだった。地震によって起こった地盤沈下と、津波によって、沼の底にある砂や砂利に変化が起きたそうだ。これによりヤマトシジミの住む場所が変わり、漁獲量は数年で四分の一に激減してしまった。

震災ほど急で大きな変化はないかもしれないが、ここ最近の雨量の変化による塩分バランスの変化はヤマトシジミの生育にじわじわと影響をおよぼすの

ではないだろうか。

涸沼は二〇一五年にラムサール条約に登録された。正式には「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という。この条約は水鳥の保護だけでなく、私たちの生活と結びついた大切な生態系として湿地の保全と再生を呼びかけている。涸沼の近隣地域の人々の仕事や生活と密接につながり、涸沼の生態系を維持しつつ、そこから得られる恵みをこれからもずっと活用できることを条件にしている。水鳥のエサとしてのシジミや水生生物が減ったり、プランクトンの異常発生が起きたりして生態系が乱れると、せっかくのラムサール条約の価値がなくなってしまう。節水を心がけ、可能な限りの努力の積み重ねが、水辺に暮らす生き物のすみかや、得られる恵みを守る一歩になるのだと思う。